

# 弱視者と晴眼者の相補的交流のあり方に関する研究 — 交流経験頻度の高い晴眼者の意識構造について —

265269P 岩坪 真理

## I 問題

共生社会とは社会の中で生活する全ての者が、その多様性を認められ、それぞれの立場が尊重されるといふ人権思想に裏付けられた社会のことである。この共生社会を成長させていくためには、人間が他者と共同生活を送る中で、相互に助け合って生きていくという視点が強調される。

晴眼者の視覚障害者に対する意識・態度及び行動に関する先行研究では、共生社会における晴眼者と視覚障害者の交流をより良いものにするには、まず、視覚障害の状態や特性に関する客観的な知識を有していることが望ましいと考えられている（河内・四日市, 1998; 河内, 2002; 徳田, 1988a; 徳田, 1988b; 徳田・佐藤, 1988; 徳田, 1989a など）。しかし、晴眼者の客観的知識だけでは、晴眼者と視覚障害者の望ましい交流を実現させるには限界がある（河内, 1979; 徳田, 1989a）。積極的な交流を促すためには、視覚障害者に対する関心度や接触経験を高めること（河内, 1979; 河内, 1990; 河内, 2004; 河内, 2006; 相羽・河内, 2011; 河内・四日市, 1998）、障害のある友達がいること（河内, 2006）、さらには、交流に対する自己効力感を高めること（河内・四日市, 1998; 河内, 1999; 河内, 2003）などが有効であることも明らかとなっている。

上に述べた知見の多くは視覚障害に関する知識や交流経験頻度の低い者から得られた知見である。また、弱視者との交流に関しては十分な知見は得られていない。そのため、弱視者と晴眼者の相補的交流の望ましいあり方について検討する際に、弱視に関する客観的な知識を有しており、弱視者

と交流経験頻度の高い者の意識について取り上げる必要性が指摘できる。

## II 目的

弱視者と晴眼者の相補的交流のあり方について検討するため、弱視者との交流経験頻度の高い晴眼者に、弱視者に対して抱いている意識構造を明らかにする。これにより弱視者と晴眼者の相補的交流のあり方について検討する。

## III 方法

### 1 対象者

複数の弱視者と同じ職場に勤めた経験があり、仕事以外のプライベートな活動も経験したことがある成人晴眼者3名（20代男性A、30代女性B、40代男性C）。3名は過去に大学等で視覚障害に関する専門的な講義を受講・聴講し、普段から専門知識を活用する立場にある。

### 2 期間

X年6月～11月

### 3 手続き

各個人の弱視者との交流に関する意識構造や潜在的なイメージを明らかにするため PAC 分析（Personal Attitude Construct）（内藤, 1997）を行った。まず、日常的な弱視者との交流から自由連想できる言葉を20語あげてもらい、それぞれの語の意味の近さを7件法により一対比較する。次に、これらの数値を統計解析ソフト HALBOU7（シミック社）に読み込ませ、ウォード法により生成された類似度距離行列であるデンドログラムを示す。さらに、デンドログラムで示された各クラスターについて、研究者と対象者が共同で質的な解釈を行った。

#### 4 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、上越教育大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号：2017-32）を受けた。

### IV 結果

#### 1 20代男性Aの意識構造

図1に20代男性の連想語ごとの意味のつながりによるデンドログラムを示す。クラスターIは「視覚障害」「QOL」「視覚情報を多大に使う作業の効率」「障害の重症度」から構成され、「視覚障害そのものの特性」となり、QOLとの関係が語られた。クラスターIIは「環境との協調」「障害受容」「物を近くで見る」「個人の特性」「早く動くことに対する恐怖感」「分かりにくい」から構成され、「生活技能や機能を含めた障害受容」となり、弱視者の環境との適応が語られた。クラスターIIIは「腰が痛くなりがち」「バランスや姿勢の崩れが起こりやすい」「ADL」から構成され、「理学療法士の視点」となった。クラスターIVは「さぼりがちな人もいる」「自信があまりない人もいる」「マイナスな発言が多い」「緊張しがち」「社会的ではない」「手の感覚が優れている」「聴覚情報による記憶が形成されやすい」から構成され、「社会から見た弱視者像」となり、対象者の望みや願いが語られた。

#### 2 30代女性Bの意識構造

図2に30代女性の連想語ごとの意味のつながりによるデンドログラムを示す。クラスターIは「自動車運転」「見えにくさ」「試験監督」「周囲から厳しくみられることもある」から構成され、「弱視者との実際の関わりの際の印象・感じ方」となった。クラスターIIは「アイコンタクトでの判断のむずかしさ」「表情」「言語補助」「冗談」から構成され、「コミュニケーション」となった。クラスターIIIは「資料の配色」「パソコン」「加齢による視力低下」「眼鏡」から構成され、「医学的情報」となり、病気や障害そのものの特性について語られた。クラスターIVは「職業的自立」「障害像」「性

格・気質」「ゆったりした行動」「視覚障害専門の教育機関」「自己主張」「真面目」「手指感覚」から構成され、「弱視者に対する一般的な印象・感じ方」となり、弱視者との関わりの際の印象を一般化した視点が語られた。

#### 3 40代男性Cの意識構造

図3に40代男性の連想語ごとの意味のつながりによるデンドログラムを示す。クラスターIは「視覚障害」「見えにくさ」「仕事に要する時間」から構成され、「心理・生理・病理」となった。クラスターIIは「理解されにくさ」「他の障害とは違う」「中間集団」から構成され、「他者との関係性」となった。クラスターIIIは「弱気な人もいる」「人間性」「進行性の眼疾患もある」から構成され、「メンタリティー」となり、弱視の様々な原因疾患による本人のメンタリティーについて語られた。クラスターIVは「コミュニケーション下手」「自己主張しすぎる人もいる」「支援の申し出」から構成され、「未熟なコミュニケーション」となった。クラスターVは「障害受容」「克服」「たくましさ」「能力の高さ」「自助努力」「本人の気持ち」「職業的自立」「共同できる」から構成され「障害に負けない強さ」となり、本人の強い意志や障害を克服しようとする姿への賞賛が語られた。

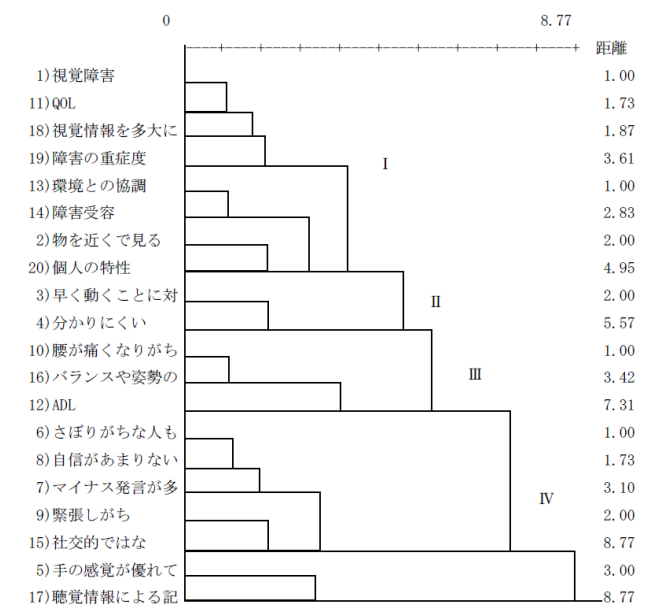


図1 20代男性Aの意識構造

## V 考察

弱視者との交流経験頻度が高く、客観的な知識も有していると考えられた3名の成人晴眼者の意識構造の中には、共通して、「弱視に関する客観的な知識」、「弱視の障害像」、「晴眼者の本音」、「弱視者の強み」に関する連想語が存在していた。これにより、弱視者に対する多次元的な見方が存在していることが明らかとなった。

20代男性Aは主に弱視者をクライアントとして見る視点が多く存在しながらも、実習先で出会った実習生との交流や、弱視者に対する要望や希望が語られていた。30代女性Bは、弱視者がクライアントである場合、職場の上司である場合、また、学生時代の弱視者との交流を振り返ることで語りが行われていた。40代男性Cは、自身が視覚障害の専門家であることと、普段から多数の弱視者との交流経験を有していたことから、弱視者に対する幅広い視点が語られていた。これらは年齢が上がるにつれて知識を基にした支援にとどまるのではなく、弱視者に対する意識は、これまでの交流経験や属性、専門性などの背景により、多次元性のあり様が変化していくことが推察された。

弱視に関する客観的な知識を有し、複数の弱視者と交流経験のある対象者の意識は、自己主張し

すぎる支援の申し出や、誤った障害受容により開き直った行動を取ることや、マイナスな発言が多いことなど、弱視者との交流に際して本音の部分も明らかにされた。同時にこれらは、弱視者が障害者ゆえに本音で言いづらく、相補的交流とはいえないものであった。しかし、障害者だと特別視する視点が障害者との関係をぎくしゃくさせ、最終的に孤立させてしまう恐れがあるとも考えられた。

以上のことから弱視者が晴眼者との相補的交流を行っていくためには、次の2点が有効ではないかと考える。1点目は弱視者が自己主張すべきところとそうでないところを的確に判断する必要性である。自己主張すべきところとは、「見え方」に関する説明やそれに基づいた障害開示の部分である。弱視者が晴眼者と共同していくためには、晴眼者側からの支援や配慮が欠かせないが、相補的交流のためには、弱視者は弱視ゆえにできないことと、そうでない甘えの部分をしっかり区別して交流していくことが望ましい。

2点目は弱視者の長所を活かし、障害を乗り越えて晴眼者と共同して社会生活を送ることである。弱視者自身の見え方や眼疾患に対する理解は、自身の障害受容を促進させるだけでなく、このような経験をすることができない晴眼者への視覚障

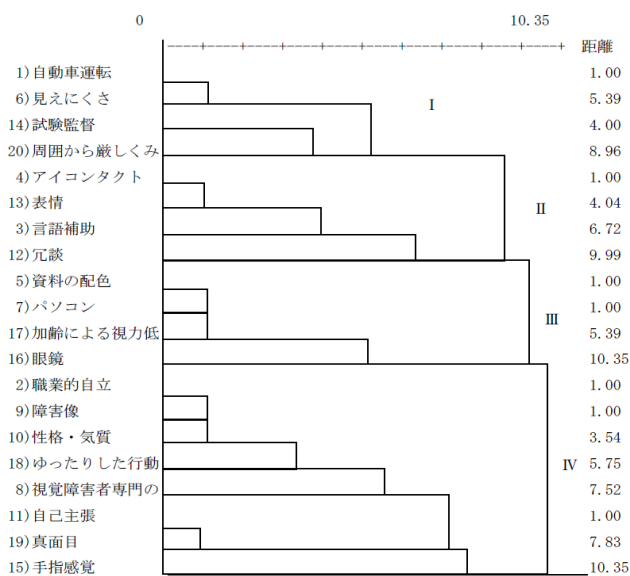


図2 30代女性Bの意識構造

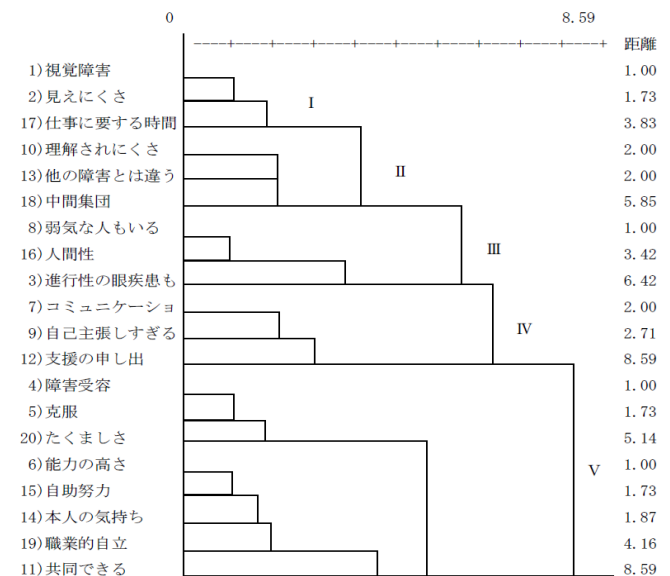


図3 40代男性Cの意識構造

害理解や気づきを促進できる可能性がある。また、周囲に積極的に働きかけることのできる全盲学生ほど、健常学生は望ましいと認知することが明らかにされている(富田・相羽・河内, 2010)。全盲と弱視は異なるものだが、本研究の3名の成人晴眼者の語りの内容を考慮すれば、弱視者にとっても同様の可能性がある。見えにくさがあっても自信を持って様々な活動を行う姿や社交的な様子は、晴眼者との相補的交流には欠かせないと推察される。このように弱視者が将来を見据えた活動を行っていくためには、支援されるばかりではなく、時には晴眼者のために支援する視点も大切であると考えられた。

## 文献

- 相羽大輔・河内清彦(2011)弱視学生の援助要請に対する健常学生の援助遂行可能性に及ぼす個人要因の効果について. 障害科学研究, 35, 7-18.
- 河内清彦(1979)視覚障害者(児)に対する学生および教師の態度. 特殊教育学研究, 17(2), 19-32.
- 河内清彦(1990)肢体不自由者(児)に対する大学生の態度構造とその形成要因としての専攻学科および性別の役割について. 特殊教育学研究, 28(3), 25-35.
- 河内清彦(1999)視覚障害学生を交流対象とした「キャンパス内交流自己効力尺度(CISES)」の作成. 教育心理学研究, 47, 471-479.
- 河内清彦(2002)視覚障害学生の学業支援サービスに対する大学生の意識構造—自己効力感、視覚障害者観、ボランティアイメージおよび支援意欲との関連—. 特殊教育学研究, 39(4), 33-45.
- 河内清彦(2003)障害学生との交流自己効力感汎用型尺度の妥当性の検討—聴覚障害および視覚障害条件の影響について—. 特殊教育学研究, 40(5), 451-461.
- 河内清彦(2004)障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件、対人場面及び個人的要因の影響. 教育心理学研究, 52, 437-447.
- 河内清彦(2006)障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について—障害者への関心、友人関係、援助行動、ボランティア活動を中心に—. 教育心理学研究, 54, 509-521.
- 河内清彦・四日市章(1998)感覚障害学生とのキャンパス内交流に対する健常学生の自己効力に関する研究. Japanese Journal of Educational Psychology, 46, 106-114.
- 内藤哲雄(1997)PAC分析実施法入門—「個」を科学する新技法への招待—. ナカニシヤ出版.
- 徳田克己(1988a)こんなにも知られていない弱視という障害—幼児教育科女子学生の「弱視」に関する疑問を通して. 弱視教育, 26(3), 30-34.
- 徳田克己(1988b)弱視児・者に対するイメージの変容に関する研究(1)—講義によって知識を与える方法の効果. 弱視教育, 26(2), 21-26.
- 徳田克己(1989a)盲人に対する社会の態度—社会の人々の態度を改善するための試み—. 視覚障害, 99, 5-24.
- 徳田克己・佐藤泰正(1988)弱視児・者に対するイメージに及ぼす弱視児・者に関する知識量の影響. 弱視教育, 26(1), 9-17.
- 富田朝未・相羽大輔・河内清彦(2010)全盲学生に対する対人魅力に及ぼす障害開示条件の効果. 障害科学研究, 34, 33-43.